

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成22年度:169.

化学療法を行う成人期胃癌患者の役割に対する思いについて

森 美緒、清水絵里加

化学療法を受ける成人期胃癌患者が生・死と向き合った中で見えたもの

6階東ナースステーション ○森 美緒、清水絵里加

【目的】

家庭や社会での役割遂行が重要となる成人期胃癌患者が、化学療法を行い、生・死と向き合った中でみえたものを明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査同意を得られた化学療法施行中のスキルス胃癌患者3名に対して、役割理論の「役割遂行」「役割期待」をもとに独自の質問項目を作成し半構成的面接を行った。逐語録からコード化、カテゴリー化した。患者に研究の趣旨、プライバシー保護について説明し同意書に署名を得た。

【結果】

化学療法を受ける成人期胃癌患者が生・死と向き合った中でみえたものの構成要素には「生きる望みと限られた時間からみえる日常の大切さ」「治療に対する肯定的な受け入れ」「生きる目標となる家族の存在」の3つの主要カテゴリーが抽出された。

「生きる望みと限られた時間からみえる日常の大切さ」は、意に反する病状進行へ葛藤しながら、生きたいという強い思いを抱いていた。病状進行への覚悟を決め、

時間の貴重さを認識し最期を考えながらの生活を送っていた。

「治療に対する肯定的な受け入れ」は、患者は感情の揺れをコントロールする力を持ち、病気になっても変わらない態度で生きようとする中で、疾患を感じさせない日常生活を送ることができていた。家族と共に食生活を共有できていることへの喜びを感じ、治療効果の実感と希望を抱きながら生活を送ることができていた。

「生きる目標となる家族の存在」は、家庭でも社会でも中心となる存在として活躍し次の世代をつくり育てる重要な時期である成人が疾患を患い、治療を続ける中で役割の遂行と葛藤を感じていた。しかし、患者は生きる目標となる家族の存在や支えを実感し、家族の絆が強化されていた。

【考察】

化学療法を受ける成人期胃癌患者は生と死が隣り合わせである、限られた時間の中で日常を意義のあるものにしたと強く願っていた。また、役割遂行に対する思いと家族の存在が生きる目標となっていた。